

全国ネット通信

地球サミット「リオ+20」にあたって ー改めて全国センターの使命を考えるー

大阪大学大学院法学研究科 教授

(一般社団法人 地球温暖化防止全国ネット 運営委員会 委員)

大久保規子

1992年の国連環境開発会議（地球サミット）から早くも20周年を迎え、2012年6月20日～22日まで、再びリオデジャネイロにおいて「国連持続可能な開発会議」（リオ+20）が開催される予定である。20年前の地球サミットでは、気候変動枠組条約や生物多様性条約が採択されるなど、目に見える法的成果があったのに対し、今回は、グリーン・エコノミーと環境ガバナンスのための国際的な組織改革が主要なテーマとなっている。実質的な成果がみえにくいいためか、地球サミットのときと比べると、リオ+20に対する日本の市民の関心は必ずしも高いとはいえないように思われる。確かに、温暖化対策等、個別の課題に関する主な交渉の場は、各条約締約国会議等の場に移っているし、3日間の会議に多くの成果を期待することは困難であろう。しかし、本来、個別の課題を超えた横断的な原則や枠組みは、まさにリオ+20のような場で議論するにふさわしい課題である。

1992年のリオ宣言第10原則は、環境問題を解決するためには、あらゆる市民の参加が必要であると謳っている（参加の原則）。その後、日本では、地球環境基金の創設（1993年）、環境パートナーシップオフィスの設置（1996年）、環境保全活動・環境教育推進法の制定（2003年）等、パートナーシップ推進のためのさまざまな施策が図られてきた。温暖化領域においても、活動推進員制度のほか、他の分野に先駆けて、多様な主体から成る地域協議会や地域の拠点となる活動推進センター制度が導入された。全国地球温暖化防止活動推進センターは、このような国内外のダイナミックなうねりの中で、地域をつなぐという大きな期待を背負って1997年に設置されたものである。2008年の法改正では、実行計画協議会に関する規定が設けられ、2010年には、地域センターを会員とする地球温暖化防止全国ネットが全国センターを運営することとなるなど、さまざまな課題に直面しつつも、パートナーシップの取組は確実に進化を続けている。

国際的に見ると、リオ宣言第10原則を具体化するため、1998年には、オースタ条約（環境問題における情報へのアクセス、意思決定への市民参加及び司法へのアクセスに関する条約）が採択された。オースタ条約は、①情報へのアクセス権、②意思決定への参加権、③司法へのアクセス権

という3つの手続的権利（以下「グリーンアクセス権」という）の保障を通じて、環境権を実効的に保障することを目的とする。オースタ条約には、2012年2月末現在45カ国が加盟しているが、日本は未加盟である。

これらの権利の保障のさらなる拡大を目指し、2010年には、UNEPガイドライン（環境問題における情報アクセス、市民参加及び司法アクセスに係る国内立法の発展に関するガイドライン）も定められ、例えば、フランスは、グリーンエコノミーの考え方の中に、市民参加を明確に位置付けるよう求めている。

東日本大震災と原発事故を経験した日本では、現在、他の国以上に、エネルギー政策、温暖化対策に関する幅広い議論と国民の参加が問われている。グローバルスタンダードであり、環境民主主義の基盤であるグリーンアクセス権を保障したうえで、日本の先進的な協働取組を国際社会に発信していくことが求められているのである。そのための情報交流・共有の要として、今、全国センターの使命が改めて問われているといえよう。



▲モルドバで開かれたオースタ条約締約国会議（2011年）



▲オースタ条約事務局がある国連ジュネーブ

平成23年度「うちエコ診断事業」によせて

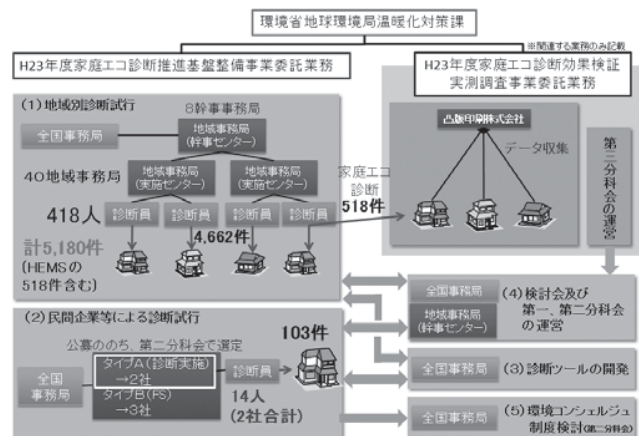
平成19年に財団法人地球環境戦略研究機構（以下、IGESという）によりIGESパイロット事業として兵庫県を舞台に始まった「うちエコ診断」は、平成20年には兵庫県事業として実施され、現在も継続中です。一方で、環境省は家庭に対する温暖化防止対策の一環として環境コンシェルジュ制度の創設に着手し、平成23年度より3年間の事業として家庭エコ診断推進基盤整備事業（以下「うちエコ診断事業」という）を開始しました。一般社団法人地球温暖化防止全国ネット（以下、「全国ネット」という）では、全国に54センターある都道府県市の地球温暖化防止活動推進センターのうち、40センターと協働で平成23年度うちエコ診断事業を受託し、家庭における温室効果ガスの削減に取り組んできました。

この診断の特徴としては、家庭固有の排出構造に基づいて診断を実施する点にあります。具体的なうちエコ診断の流れとしては、受診家庭ごとの排出構造を診断ソフトにより見える化した上で、受診世帯のある地域における平均的な家庭からのCO₂排出量と比較したり、診断員と受診者がコミュニケーションをとりながら、その家庭の状況に応じた効果的で実行可能なCO₂排出量の削減対策を提案していきます。



▲うちエコ診断の流れ

平成23年度「うちエコ診断事業」では、右上の図に示す様に全国418名のうちエコ診断員と40のうちエコ診断地域事務局によって、5,180件の診断が実施されました。



▲平成23年度うちエコ診断事業の概要

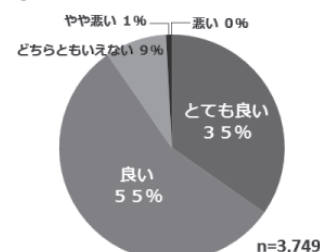
とりまとめの結果、事後調査票の回収が可能であった3,258世帯のみなしCO₂削減量の合計は、3,228t/年となり、受診世帯あたりのみなしCO₂削減量は、991kg/年/世帯となりました。

診断結果を詳しくみると、診断時において受診世帯の方にCO₂削減対策として選択頂いた対策数のうち41%の対策を実施していただいたことが分かりました。

また、実施して頂いた対策の種類としては、「アイドリングストップを実施する」、「節水シャワーヘッドを取り付けて利用する」、「シャワーを使う時間を短くする」の3つの対策がすべての地域においてTOP5に入っていました。また、TOP5の残りの2つの対策については、北海道から中国・四国地方にかけて「暖房の設定温度を控えめにする」が、九州・沖縄地方で「扇風機を使いエアコンを止める」などの地域に特有な対策もTOP5に入っており、全国共通的な対策と、地域特性を反映した対策がそれぞれTOP5に入っていることが分かりました。

更のうちエコ診断の受診者の方へのアンケート結果によれば、85%の受診者の方から評価をいただきました。

Q 診断員による提案内容はいかがでしたか？



◀ 受診者満足度調査結果の一例

今後も全国ネットでは、政府が掲げる「チャレンジ25」の中で目標としている2020年25%削減に寄与するため、地域センターとの協働により、このうちエコ診断事業の推進に取り組んでいきたいと考えています。

低炭素杯 2012

日本一が決まりました！

各地で活動する学校・有志・NPO・企業などの方々が、その優れた活動のプレゼンテーションを通じて発信し、様々な方々との交流を深め、学び合い、連携の輪を広げていく「低炭素杯2012」が、2月18日・19日に開催され、今年度の日本一が決まりました。
受賞された団体の皆さま、おめでとうございます。



▲低炭素杯2012トロフィー

環境大臣賞 グランプリ 栃木農業高等学校 地域おこしプロジェクト班

金賞（地域活動部門） NPO法人 あきた菜の花ネットワーク
金賞（学生活動部門） 神奈川県立相原高等学校畜産部
金賞（企業活動部門） アイフルホームカンパニー
金賞（ソーシャルビジネス部門） 有限会社 仲田種苗園

特別賞

東日本大震災被災地域貢献活動賞 いわてバイオディーゼルネットワーク
NPO法人 日本の森バイオマスネットワーク
NPO法人 そらべあ基金

協賛・協力企業賞

節電対策貢献活動賞 ENEX株式会社
最優秀グローバル賞 那須温泉地球温暖化対策地域協議会
最優秀家庭エコ活動賞 マテックス株式会社
最優秀地域活性化賞 香川大学直島地域活性化プロジェクト
最優秀コミュニケーション賞 宗教法人 長泉寺

審査員特別賞

株式会社大林組 名古屋支店
株式会社ピコエイド
最優秀地域エコ活動賞 越谷市立大袋東小学校
社会福祉法人 喜育園立山東保育園
最優秀プレゼンテーション賞 中越パルプ工業株式会社 川内工場
最優秀地域連携賞 特定非営利活動法人 アサザ基金
最優秀イノベーション賞 おひさま進歩エネルギー株式会社
社団法人東京都トラック協会
ユニークプレゼンテーション賞 株式会社 セタ

低炭素杯2012グランプリ Interview

「栃木農業高等学校地域おこしプロジェクト班」の皆さんにお話を聞きました！

グランプリを受賞されて、感想を率直にお聞かせください。

とても嬉しかったのはもちろんですが、グランプリで名前を呼ばれた時は、驚きました。最優秀地域活性化賞や学生部門金賞は受賞できるのではないかと期待していましたが、他の団体さんの優れた取り組みが受賞したのを見て、「今年もダメか…」と思っていたため、びっくりして声も出ませんでした。

低炭素杯2012でグランプリを受賞されて、反響はありましたか？

多くの新聞社からの取材を受けました。近所の方から「新聞見たよ」と声をかけられることもあり、活動の認知度が上がったのではないかと思います。市民の方々が家庭でヨシズを利用する夏までは時間がありますが、広く使ってもらえるのではないかと思います。

受賞された取り組みについて、簡単にお聞かせください。

渡良瀬遊水地の生態系や農村のヨシズ産業を守る活動です。農家の方のヨシズの刈り取りやヨシズづくりのお手伝いを行い、くずヨシからつくる「ヨシ堆肥」の開発と施肥を行っています。ヨシ堆肥は学校近くの観光名所「太平山」のあじさい坂や桜並木、足尾銅山で植林を行った場所などに使いました。これまでも行ってきた活動ですが、昨年は震災後の節電対策としてヨシズの活用をアピールしました。低炭素杯2012当日のプレゼンテーションでは、これまでの反省も踏まえて、実物を出来るだけ見てもらうなどの工夫もしました。

今後はどのような活動がされていきますか？

栃木県は全国一の麻の生産地ですが、以前と比べて生産量は少なくなっています。環境にもやさしい「麻」を活用するプロジェクトにも、もっと力を入れていきたいと考えています。麻の表皮を使った下駄・鼻緒・神社のしめ縄などの伝統産業の復活と、表皮を取り除いた「おがら」を使った新しい建材の開発・普及に取り組んでいきたいです。

そして、伝える活動にもっと力を入れていきたいです。今も足尾の小学校へ出前授業を行っています。今後は地元の栃木市でも実施していく予定です。「とても広い遊水地の魅力や固有種を含むたくさんの生き物が生息するヨシ原について、環境科学部に入って初めて知った！」という部員も多く、地元ならではの魅力をもっと広く知って欲しいと思っています。



▲栃木農業高等学校の皆さん

貸出教材をご活用ください

全国ネットでは、地球温暖化についてわかりやすく伝え、地球温暖化防止に向けた行動への一歩を踏み出すためのきっかけとなる参加型の学習教材「活動プログラム」等のツール教材の貸出を行っています。

- 貸出物：パネルセット31種類、タペストリー9種類、紙しばい、ゲーム、DVDなど
- 貸出期間：原則2週間まで
- 料金：無料（送料のみご負担ください）

オススメ

教材ツールの新しいカタチ

「Step By Stepツール」

今年度より効果的な温暖化防止活動を提案するために、地球環境基金の助成を得て『「効果の見える」CO₂排出削減に寄与する温暖化対策学習モデル事業』において、新たな参加型の環境教育プログラムの開発を行いました。

3つのステージに構成されており、講座と自宅（家）での実践を交えて行う活動プログラム教材で、「くり返し」が学びを深めます。現在貸出整備中ですので、シリーズ講座や学習会での使用にぜひ体験してみてください！



◀ステージⅠ イイネすごろく
▲ステージⅢ 10年後、2021年のわたし

賛助会員募集中!

一般社団法人地球温暖化防止全国ネットの活動をサポートしてください!

年会費：個人会員 1口 5,000円 (1口以上) 団体会員 1口 20,000円 (1口以上)

編集後記

何はともあれ、平成23年度が終わりました。平成23年度は、当法人が通して過ごすことができた初めての年度になりました。

東日本大震災があったなかで、法人運営に関する「ヒト」「カネ」「モノ」について殆どすべてのことをこの1年で経験しました。創設まもない困難ななかで、節電対応、うちエコ診断事業、コンソーシアム事業、低炭素杯2012など、事業を戦略的に取り組みつつ多くの成果を得ることができました。

これは、ひとえに会員各位の支援と協力のおかげです。また事務局職員の献身的な取り組みのおかげと感謝しております。

24年度は組織の創設・黎明から次のステージへという年になるかと考えています。引き続きよろしくお願い申し上げます。

専務理事・事務局長 菊井 順一

編集・発行

一般社団法人 地球温暖化防止全国ネット

〒101-0053 東京都千代田区神田美土代町9-17 神田第三中央ビル5F

TEL. 03-6273-7785 FAX. 03-5280-8100 WEB. <http://www.zenkoku-net.org/>

全国ネットの第3回社員総会が開催されました

平成24年3月14日(水)13時30分より、東京都千代田区神田多町の情報オアシス神田セミナーハウスにおいて正社員（地域地球温暖化防止活動推進センターの指定団体）が出席して第3回社員総会(平成23年度臨時社員総会)が開催されました。

長谷川公一理事長の開会挨拶、環境省地球環境局地球温暖化対策課課長室石泰弘様の来賓挨拶の後、同理事長が議長席に着き、議案の審議が行われました。

議案として提出された、平成24年度正会員、準会員、賛助会員の会費を定める件、平成24年度事業計画(案)の承認に関する件、平成24年度収支予算(案)の承認に関する件について、慎重に審議され、いずれも承認可決されました。

平成24年度は、NPO連携促進事業、家庭エコ診断推進基盤整備事業などに取り組むこととなりました。

▶ 第3回社員総会での理事長挨拶の様子



エコアナウンサー

櫻田彩子のミニコラム

AYAKO SAKURADA PROFILE

宮城県出身。テレビ朝日「ちい散歩」レポーターほか、低炭素杯2012の司会進行など



私も賛助会員です!

東日本大震災後1年を前に行われた『低炭素杯2012』。今回は、地域で低炭素社会に向けた取り組みを頑張る方々の使命感に加え、震災に対しての当事者意識を強く感じました。被災なさった方々だけでなく、他の地域の方々も一体感と精いっぱい想像力によって「自分にできることは何か」を求め行動して来た、それが、地域で低炭素社会に向けた取り組みの中で存分に発揮されていたように感じます。司会をしながら、とても誇らしい気持ちにさせて頂きました。心からありがとうございました。

そして、ぜひお伝えしたいのが「がれきで作ったトロフィー」のその後です。石巻市立湊小学校の6年生が木工造形家の齊藤公太郎さんと作ってくれたのが低炭素杯のトロフィーでした。そもそも、湊小と低炭素杯のコラボが叶ったのは、秋田市センターの菊地さんが震災直後石巻にボランティアで入っていたおかげで繋がったのです。湊小6年生は低炭素杯のトロフィー製作の際、卒業制作としての「トロフィー」も製作。これは、湊小の教頭先生と齊藤さんが相談なされて形になったものです。その後、被災地のがれき処理問題においてこのトロフィーが一躍脚光を浴びることになりました。6月末まで皇居外苑の楠公レストハウスにてトロフィー展示が行われました。



▲皆の思いが輝くトロフィー!